

書き下し長篇推理

しかばね

わが屍に石を積みめ

麗 羅



に石を積み

麗 羅



集英社

麗羅(れいら)

本名鄭埭汶。大正13年朝鮮慶尚南道咸陽郡生れ。東京高工付属工科学学校卒業後、日本軍に入隊。復員後、米軍府中基地勤務。以後、不動産業など各種職業を経験。昭和48年5月、「ルバング島の幽霊」で第4回サンデー毎日新人賞(推理部門)を受賞。他に「死者の柩を揺り動かすな」「倒産回路」「山河哀号」(共に集英社刊)がある。

わが屍に石を積み

一九八〇年七月二十八日 第一刷発行
一九八〇年九月二〇日 第二刷発行

定価 九八〇円

著者 麗羅

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇―六三六
販売部 二三八―二七八

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

©1980 REI LA, Printed in Japan

0093-775018-3041

わが屍に石を積み——目次

奔流に流されて……………7

敵前逃亡……………37

伽倻国への旅……………67

積石古墳……………90

暗い海流……………116

母娘……………135

大興財閥……………157

白骨の遺産……………184

誰が箱舟を流したか……………206

装帧 大森英樹

わが屍に石を積み

奔流に流されて

1

昨日は終日雨が降った。霧のように細かい雨脚が、強くも弱くもならないで、絶え間なく降り続いた。

気温も上がらず、七月下旬なのに、春の初めのように肌寒かった。

今朝からは雨が断続的になった。そして、止んでいる時間が次第に長くなって、午後の三時過ぎにすっかり止んだ。

しかし、晴れ上がったわけではない。気温は依然として低く、空には厚い雲が垂れこめていた。五里介から西北方にあたる紫梅山は標高がたったの三百五十メートルだが、その頂すら雲に没している。この地方では、紫梅山が天気を占う目安になっている。その山頂が晴れないうちは、天気が回復しない。

五里介の渡し場は、太平面^{たいへいめん}太平里^{たいへいり}の外れにあった。集落の中心から東へ一キロ半も離れた河岸に、藁葺き屋根の小さな軒家が建っていて、渡し守りの呉基錫と娘の愛子が二人きりで住んでいた。

雨のせいかな、昨日も今日も渡船客が少かった。呉基錫は雨が止んだのを見て、流木拾いを始めた。数え年で十一歳になる娘の愛子も、堤防に出て父を手伝った。

五里介の前を流れているのは南江である。水位が平時よりも二メートルほど高くなっていた。河幅は百メートルほどもあるうか。

いつもはまっ青な水が湖のように淀んで見えるのに、今日は黄緑色に濁り、小さい波頭を無数に立てて、かなり早く流れている。そこへ舟を漕ぎ出すのだから、流木拾いは楽な作業ではなかった。

呉基錫は三十九歳だった。身長が百八十センチもあり、やや面長だが俎板^{そくばん}のように角ばった顔つきで、雄牛のように太い首、がっちりとして広い肩幅と部厚い胸、丸太のように太い手足を持った逞ましい体格である。

呉は太平里一番の力持ちだし、泳ぎもうまい。濁流の中を、長い竹竿で小舟を自在に操った。小さな木片は引き上げて舟に載せ、大きな流木は縄で舟尾に繋いだ。

ある程度に達すると岸に寄せて、拾ったものを陸揚げした。待ち構えていた愛子が、それを堤防の上に運んで並べた。

南江は、朝鮮半島第二の大河——洛東江の第一支流である。慶尚南道西北境の小白山系から発して、はじめは既ね南流し、途中で東に向きを変えて本流に入る。五里介のあたりが丁度その屈曲部で、河流がS字型に蛇行して上流下流とも見通しが悪い。

夕暮れが迫まっていた午後六時ごろ、濁流に揺れながら流れて来たその箱舟を、先に見つけたのは、高いところ立っていた愛子の方だった。

「父さん、あそこに舟が……」

愛子が疍高い叫び声をあげた。

呉は小舟の上で腰を伸ばして、娘の指す方を見た。

小型の、十人ぐらいしか乗せられない古い箱舟だった。流れの中央をゆるやかに旋回しながら押し流されている。人が乗っているようすはない。

この河の上流には渡し場が多い。どこかの渡し場から舳い綱が解けて流されたのだろう。今日一番の獲物だ。呉は喜んだ。

持主が探しに来れば相当の謝礼をもらえろし、持主が

現われなかったら、解体して舟を修理するときの用材にできる。呉は、それに向けて舟を進めた。

箱舟に接近した。中を覗いて、呉はびっくりした。底板に人が倒れていたのだ。

坊主頭をした小さな男の子だった。平な舟底に仰向けになっている。黒い半ズボンに白いシャツを着ているが、上下ともずぶ濡れである。身動きひとつしなかった。顔色が白っぽくて血の気がまったくなく、両目を閉じていた。

死んでいるのか。呉は息を呑んだ。箱舟を急いで自分の舟と繋ぐと、飛びこむように乗り移った。

子供のシャツをめくって、胸に手を当ててみた。体は冷たいが、心臓はまだかすかに鼓動している。舟底に水が溜まっているが、浅いので飲まなかったらしい。

呉は、子供を抱き上げて自分の舟に移した。そして、岸に向けて、竹竿がしなるほど力いっぱい漕いだ。

呉は、岸の杭に二隻の舟を舳うと、子供を抱いて家に走った。愛子は口もきかずに真剣な表情で見守っていたが、父の後を追って駆け出した。

部屋に入ると呉は、子供を裸にした。愛子に言いつけて乾いた布を出させ、子供の体を丹念に拭ぐった。

オンドルの一、番暖かい個所に、子供を寝かせた。呉は大きな手で子供の肌を摩擦した。愛子も父を見習った。だが、子供の意識は回復しない。体温も容易に戻らなかった。

「愛子、お前裸になって、この子を抱いて寝てやれ」

呉は厳しい口調で娘に命じた。呉自身の体は長時間の水の上作業で冷えきっていた。それに、子供の愛子の方が体温が高いと考えたのだった。

愛子は羞恥を感じる年ごろになっていた。しかしためらわずに裸になると、子供の上におおいかぶさった。

呉は二人の上に布団を掛けてやった。そして部屋を出て炊事場に入ると、竈に火を焚いた。呉は残り少なくなった白米を割いて、粥を作りにかかった。

呉は竈の中で赤く燃えている炎を見つめていたが、ふと、子供を運んで来た箱舟の舳い綱が異常だったことを思い出した。箱舟にはたしか一メートルほどの綱がついていた。それは舳い綱としては短かすぎる。しかも綱の先端が、鋭利な刃物で切断された状態だった……。

まさか？ 呉は首をかしげた。おれの見間違いかもしれない。しかし、すぐにたしかめずにはいられなかった。呉は竈に丸太を三本くべると、炊事場を飛び出し

た。

箱舟の舳い綱は、呉が思い出した通りだった。舳い綱は丈夫な麻製で、四、五メートルの長さが普通である。それが箱舟のそれは、一メートルしかなかった。切り口も新しい。

箱舟の舳い綱は自然にほどけたのではなく、誰かが故意に切断したのだ。

誰が、どうして？

南江は五里介から下流は平野の中をゆったりと流れるが、上の方には急流が多い。それに昨日からの雨で水嵩も増している。あんな小さな子供が乗っているのに、誰が綱を切ったのか？

夜に入って、子供がやっと目を開けた。切れ長の澄んだ瞳で、長い睫をしている。

家には男の子の衣類がない。呉は、愛子の夏物の上衣と下穿ぎを着せてやった。

子供はすっかり元気になった。愛子がよそってやった粥を残らず食べた。

「お前は、どこの村の子供かね？」

呉がやさしく訊ねた。

子供はとまどったような顔をした。呉と愛子の顔をか

わかるが、返事をしなかった。

こんな小さな子では、自分の村の名を知らないかもしれない。呉は、今度は、

「お前のような子供が、どうして一人で舟に乗っていたんだね？」

と訊いた。

子供は何かを思い出そうとした。だが、思い出せないらしく、黙ったままだい。

「お前の歳は幾つだね？」

「六歳です」

初めて口をきいた。その年ごろの子供に似合わない礼儀正しい言葉使いだった。

「六歳か。それで、姓は何という？」

「キムといいます」

「名前は？」

「ヤングといいます」

子供がはきはきと返事するので、呉は満足そうにうなずいた。

「ヤングは、お父さんの名前を知っているのかね？」

「わかりません」

「それじゃ、お母さんの宅号は？」

韓国南部の農村地方では、女性が名前で呼ばれるのは娘時代だけである。既婚女性は、彼女の実家の地名、あるいは出身地を取って宅号たくごうがつけられ、それで呼称される。

「イーブン宅たくといいます」

その他にも呉が色々と質問したが、子供が返事できたのは、その四つの事項だけである。

本当は、子供にはもつと多くの記憶があったはずだ。目を閉じると先ず、天を支えるように聳え立っている雄大な山容が浮かぶ。故郷の家の庭先から朝な夕なに見馴れた山だ。家々はその山裾に肩を寄せ合って立ち並び、村の前の段々になった水田を過ぎると、大きな河流に出る。

何故か彼には、父への記憶はない。だが、母の面影は鮮明だ。色が白く、端麗な面ざしだった。彼が眠っているときも起きているときも、常に、春の陽ざしのように温かくて慈愛深い視線を感じた。

また彼には、よちよち歩き of 可愛い妹の記憶もあった。彼は妹を「ングジャ」と呼んだ……。

そして、「ングジャ」を背負い、自分の手を引いて、田圃道を歌いながら歩いた「スウニイ」という娘のこと

も憶えていた。「スウニイ」は背が高かった。まっ黒な髪を長く編んで背中に垂らし、その先端の赤いタンギ（リボン）が腰のあたりで揺れていた。

2

記憶のひだにはそれらのことが刻まれていたが、数え

年六歳の彼は、言葉で表現する術を知らなかった。身元を探す手がかりがありはしないか、呉は、子供の衣服を念入りに調べた。半ズボンは黒い綿サージで、シャツは細い織りの麻布製だった。ズボンの下に白いキャラコの猿股を穿いていたが、手がかりになるものは発見できなかった。

この子が、かなり裕福な家の生まれであることは間違いない。顔つきや、衣服、言葉使いなどが、それを物語っている。

呉は考えた。子供の家では、今ごろは大騒ぎしているに違いない。夜が明ければ必ず両親が探しに来るだろう。

それにもう一つ、箱舟の持主が探しに来れば、子供の身元の手がかりが得られる。子供の家は、箱舟の場所から遠くないはずだ。

だから呉は、子供の身元を探すことを、まったく心配しなかった。

四日が過ぎた。

子供と箱舟のどちらも、探しに来る人はいなかった。箱舟は持主が諦めてしまったのかもしれない。考えてみると、もし途中で引き止められずに流れていったとしたら、洛東江の本流に乗って金海の海に入っただけだ。五里介に留まっていることが判ったとしても、ここで陸揚げして上流に運ぶには、たいへんな経費がかかる。

だが、子供は違う。親がわが子を探さないはずがない。それとも親たちは子供が舟で流されたことを知らないで、見当違いの方面を探しているのだろうか？

子供は、次の朝は元気で起きた。この年齢の子供なら家や両親を恋しがってめそめそするだろうに、そんな素振りも少しも見せず、前からこの家にいたように明かっていた。性質も素直なようだ。呉や愛子何かを言いつけると、はいと返事をして言いつけた通りにした。

愛子は小学校四年生だが、今は夏休みなので終日家にいる。子供を片時も放さなかった。まるで人形でも買ってもらったように嬉々として、こまごまと世話をやい

た。

呉は二人のようすを、目を細めて眺めた。このままこの子の両親が現われなければならない、と思った。そして、うちの子として育てられる。愛子も可愛い弟ができて、孤独でなくなるだろう。

学校に通っていても愛子には友だちができない。それは、家が村外れに孤立しているせいだけではなく、愛子の亡くなった母親が日本人だったからだ。大人たちはさすがに何も言わないが、子供たちは愛子を見ると「倭女」と言っただけで、愛子には友だちができない。それは、家が村外れに孤立しているせいだけではなく、愛子の亡くなった母親が日本人だったからだ。大人たちはさすがに何も言わないが、子供たちは愛子を見ると「倭女」と言っただけで、愛子には友だちができない。

六年前までは、朝鮮は日本の侵略を受けていた。朝鮮人が日本人を嫌うのは当然だ。だが、愛子に何の罪があるというのだ。愛子が日本人の母を持ったのは、日本の女性を妻にしたおれの責任ではないか。

呉は、いつも孤独で、子供たちから「倭女」と罵られても歯を喰いしばって堪えている愛子が、不憫でならない。だから、河から拾い上げたその子供が、ずーっと居ついてくれればと思った。

だが、そうもいくまい。呉の良識が考え直させた。服装や行儀作法から見ても、その子供の家かなりの資産家で、両親が教養があることが推測できた。自分のところ

のように貧乏で片親だけの家よりも、金持の両親のところに戻すのが子供のためだ。

五日目の朝早く、呉は五里介を出発した。渡し場の仕事は村の友人に頼み、愛子には子供の面倒をよくみるように言いつけておいた。

呉は河筋をさかのぼった。途中、渡し場があるところでは、必ず足を停めた。舟が失くなっているのか？その近くの村で子供が行方不明になったという話はないか？聞きこみを繰り返しながら上流に進んだ。

昼時分に、山清郡新安面院旨に着いた。そこは五里介から二十キロほどの地点である。院旨の国道に面した酒幕（居酒屋兼食堂、簡易な旅人宿）で、簡単な昼食を取った。

呉が五里介の渡し守りだと判ると、酒幕の主が、一つのニュースを伝えた。

院旨から八キロほど上流に、新峴と呼ばれる渡し場がある。具太奉という四十五歳の男が渡し守りをしていたが、その具が四日前に共産ゲリラに惨殺され、舟もなくなった、という。

四日前なら丁度日が一致する。しかも新峴の渡しでは箱舟を使っていた、という。新峴のあたりでは、河幅が

狭いが、水深が深くて急流である。だから竿を使えず、兩岸の間に太い鉄線を張り、箱舟の舳の先に丸い環をつけて、それを鉄線で通して、渡し守りが鉄線をたぐって往復する。

「ご主人、その話しを、もっと詳しく聞かせてくださいませんか」

具は、酒幕の主人に頼んだ。

新峴の渡し場は、行政上では新安面外松里に含まれるが、人家からは二キロも離れて孤絶していた。

このあたりは南江上流でももっとも峻岨な地勢である。左岸に屯鉄山、右岸に熊石峯と二つの高峻が聳え立って、流域が極端にせばまっている。右岸は切り立ったような断崖をなし、左岸は大小の岩石がごろごろした河原が連なっていて、そのところどころに松が群生している。

渡し場は、広い松林の外れになっていた。具太奉の住居は外松里の集落にあったが、渡し場にも粗末な小屋を建て、昼間は小屋に詰めて、客を渡したり川魚を獲ったりして細ぼそと生計を立てていた。

彼は妻子のいない独身者だった。口下手で人付き合いも悪かった。村に遠縁の親類もいたがまったく往き来しなかったし、近所の住人たちとも親しくしなかった。

だから事件のあった日の夜、彼の家は暗く閉ざされたままだったが、外松里の人は誰一人としてそのことを気にも掛けなかった。

具の死体は、三日前の朝十時ごろ、山清警察署所属の巡回パトロール隊によって発見された。

李信祚警査（巡查部長）が指揮する十二名の義勇防衛隊が、八時半に本署を出発して、十時に新峴に着いた。鉄線に繋留してあるはずの箱舟も見えず、具は冷たくなくて小屋の中に倒れていた。

李警査が死体を調べた。前額部と左胸部に一発ずつ弾丸が撃ちこまれていた。具は両眼をいっばいに見開き、恐怖の表情のまま硬直していた。

至近距離から射つたに違いない。それも頭と心臓を一発ずつだ。どっちを先に射つたか判らないが、どれも致命傷といえる。小屋の外や周囲には血痕が散つていない。具はその場所で殺されたのだ。死体の冷たさから推測して、かなりの時間が経過していることはたしかだった。

李警査は、具とは顔見知りであった。具が日没と同時に小屋を閉めて、外松里の家に帰ることを知っている。時刻は昨日の夕方前。そして、ゲリラの仕業に違いな

い。山から下りて来たゲリラが、箱舟を利用して河を渡った。渡り終ってから、具が警察に自分たちのことを報告するのを防ぐために射殺した……。

李は前進を中止した。もつとも李たちの巡回コースは河を渡って熊石峯の山麓に入るものだから、舟がなくては渡河することができないのだ。

李は、隊員の中から足の速い者を選んで、本署に急行させた。自分は残りを指揮して、松林一帯をくまなく調査した。収獲はなかった。

本署から情報主任の文警衛（警部）が、三人の部下を連れて、ジープで到着した。ジープは松林の中に入れないので、国道の路肩に駐めておき、二百メートルばかり歩いた。

警察からの通知が行って、外松里の区長や具の居住班の班長、親類の男たちも駆けつけた。

ゲリラの仕業だという李の判断に、文情報主任も賛成した。

「相手がゲリラじゃ、しょうがないな。村に運んで葬式を出してやりなさい」

主任が区長に指示した。

「このホトケは独身者で妻子がいません。近い親類もい

ないから、村に運んでも処置に困ります」

区長が当惑の色を見せた。

「それでは、どこかそこら辺にでも埋めてやりますか？」

若い主任は、自分より少し年長の部下——李警査に相談した。

「それはいいですが、道具を持って来てないから、土を掘ることができないですよ」

「どうでしょうか？ うまいことに人手が多いから、石を沢山積んで死体が見えないようにしたら……」

区長が提案した。

具の死体は百メートルぐらい上流の少し窪んだところに運ばれた。義勇防衛隊員が石を運んで、死体の上をおおった。

「石はなんぼでもあるから、できるだけ沢山、丁寧に積んでやれや」

主任や李と区長たちは少し離れたところでタバコを吸いながら、防衛隊員たちを指揮した。

小さな石塚ができ上がった。でき上がってみると、それは前からそこにあったように松林に似合った。

「区長さん、外松里の人で、誰か新しい渡し守りになる